

---

# 守りたいもの、諦めた未来

ぐり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守りたいもの、諦めた未来

### 【ISBN】

N2295X

### 【作者名】

ぐり

### 【あらすじ】

シェラール王国の王都チクルに暮らすティアは病弱な弟を養うため、自分の身の危険も顧みず、その手を汚れた仕事に染めていた。ある日、ティアの元に、依頼主の正体もわからない仕事が入る。今までに無い額の報酬は、弟の薬代としては十分な額で……。

ショーラール王国の王都チクルを静かに流れるラル河。

國を潤す母なる河を渡る橋の下に、ティアが造つた墓がある。草が生い茂り、人が訪れる事などほとんど無いこの場所にひっそりと隠されるように造られた墓の前で、ティアは今日も祈つていた。

自分が奪つた命がどうか安らかに眠れますように」と。

ティアを包むのは、河を流れる水の音と風に撫でられ微かに音を立てる周囲の草のざめきのみ。周囲はすっかり夜の闇に覆われていて、ティアの頭上にある橋の上を誰かが通りそうな気配もない。

私の声は彼らの眠りをさまたげるだけかもしない。誰が自分を殺した相手の祈りを欲するものか

ここへ祈りに来る度にそんな思いに駆られるけれども、それでも祈らずにはいられなくて、ティアは新月が暗闇を運んで来るたびに花と祈りを捧げにこの場所へ来てしまつ。祈りを捧げるべき数多くの人の亡骸はそれぞれ別々の場所に埋葬されていて、ここにあるの

はティアが自分で造った中身の無い簡素な墓だけだといふの。」

墓の前にはティアが持ってきた花が置かれている。

セラムと呼ばれるこの白い花は、水を遣ることが無くとも当分の間枯れずに咲き続ける不思議な花だ。ティアが死者にこの花を捧げるようになつたのは、遠い記憶の向こうで誰かがこの花を好きだと言つていた気がしたからだ。それを言つていたのが誰なのか、そんな話をしたのがいつの事だったのかも覚えていないが、ティアが今の仕事を始めるよりも随分前の事だったような気がする。

## 仕事

今の仕事 暗殺業に手を染めるよつ前は、自分にも幸せな時があつた。

「・・・あなたたちに捧げる花くらには、汚れていなかつた頃の自分が選んだものにしたい。だけど・・・。そんなことしたつて誰も喜ばないよね。私が憎いよね。」

新月の下の暗闇の中、ほんの僅かにティアの姿が浮かび上がる。あと少しで17の誕生日を迎える少女の、細身のしなやかな体は少しだけ丸みを帯びており、背中まで伸びた淡い金色の髪の毛は風でさらさらと揺れている。

ほつそりとした顔の中心で輝いているだらう一つの瞳は、今は閉じられていて見ることができないが、それもティアの美しさを損なう理由にはなつていない。

形の良い唇からこぼれ落ちたその囁きは誰の耳に入る事もなかつた。

ティアが今日命を奪つた相手はそろそろ壮年に入ろうかという体格の良い男だつた。

来月行われるという娘の結婚式の話を、物売りの振りをして近づいた見ず知らずのティアにまで嬉しそうに話していた幸せそうな表情が印象に残つてゐる。

驚きに見開かれた眼。

何故、という驚愕の表情。

痛みにうずくまる姿。

一刻の苦しみの後に動かなくなる、体。

彼の娘は突然命を奪われて結婚式に出席する事が出来なくなつた父親を想つて悲しみに暮れ、その命を奪つた人物をこの先もずっと怨み続けるだろう。

誰を恨めばよいかもわからないまま、恨み続けるのだ。

こんな光景は今までに何度も目にしてきた。

ティアが奪った生命の数と同じだけ、ティアが生み出した悲しみが存在する。

彼らの悲しみに対して罪を償つ事もできず、彼らの怒りをこの身に受けることもできない自分はどれだけ卑怯な存在なのか。

祈ることを続けているのは罪悪感を少しでも減らしたいという心の奥底の本音が知らず知らずのうちに行動に現れているからなのかもしれない。この生き方を選んだ事に後悔はしていないが、拭い去る事のできない罪悪感だけはいつになつても慣れる事がない。

いや、そうじゃない。この心地の悪さはそんなものじゃない。

結局は罪悪感という気持ちを、自分の心を守るために利用しているだけなのだ。罪悪感を抱く事で、彼らの命を何のためらいもなく奪つた自分がまだ人間らしい心を持っていると思いたいだけなのだ。本当にそんな感情を持っているのだったら、人を平気で殺すことなんてできるはずがない。

現に今日だって人を一人殺してきたばかりじゃないの。

幾筋もの涙の跡が残る頬にまた一粒涙が零れたが、それを拭うこともせず、ティアはただ祈り続けた。

何が悲しいのか誰に対する涙なのか。自分でもまだよくわから  
ない。

## 守りたいもの

「姉さん、お帰り。今日は遅かつたんだね」

家に帰り着いたのは随分と夜遅くだったのに、弟のキールはまだ起きていて、食事を用意して待っていた。

「ただいまキール。今日はね、ほら・・・ラルゴさんにこき使われて。ラルゴさん、私相手だと容赦がないんだから、もう。『ティアなら出来る』の一言だけで、何でも私にさせようとするの。今日だつてラルゴさんが汚しまくつた床を私がひたすら磨いたの。ひどくない？」

普段のティアは、近所に住む10歳上のラルゴという男が営む食堂で働いている。5年前に流行り病で両親を亡くしたティアとキールの姉弟が今まで生きてこれたもの、昔から二人をよく知るラルゴが、親身になって2人の生活を支えてくれたからだということを、ティアもキールもよくわかつていた。

「ははっ。姉さんがそれだけラルゴさんに頼りにされてるんだよ。いいなあ、楽しそうじゃない。」

すっかりと冷めてしまった夕食のスープを火にかけながら、キルがティアをなだめるように言った。

「そう？・・・まつたく、しょうがないよねえ。私が居ないとダメなんだもん、あのお店。私がいなかつたらとても人様に出せる料理なんて作れないよ。あんなにおいしい料理を作れる人が、どうしてあんなに片付けられないのかしら。」

鍋から立ちはじめたおいしそうなスープの香りをかぎながらティアがぼやくと、キールが笑った。ティアがぼやくのもキールがなだめるのもすっかり当たり前のことであり、今日も一人だけの家の中には穏やかな時間が流れていた。

「そんな事より、キールはこんな時間まで起きてて大丈夫なの？昨日まで寝込んでたのに、寝不足のせいでまた体調崩してベッドに逆戻りなんてことになつたら笑えないんだからね。」

ティアより2つ年下の弟キールは、亡くなつた母親に似て昔から体が丈夫ではない。15になつた今でも月の半分はベッドの中で過

ごしているほどに、すぐに体調を崩してしまつ。ティアも同年代の少女に比べれば華奢な方であるが、キールのようにすぐに寝込んでしまうことはあまりなく、大きな病氣もこれまで経験していない。

「うん、大丈夫だと思つ。昨日も熱自体はほとんど下がつてたから。姉さんが疲れて帰るのに、食べ物の一つもないのはかわいそうだと思つてさ。」

「そつか、ありがと。」

弟の優しさに、そつきまでの重く暗い気持ちが少しだけ軽くなつていいくのがわかる。

ラルゴの店で働かせてもらつてゐるティアだが、月の収入は兄弟二人が生活するのが精一杯でキールを定期的に医師のもとへ通わせるほどの余裕は無い。

ティアが裏の仕事を始めたのも、弟を医者に診せる金を稼ぐ為だった。

ティアに裏の仕事を紹介したのは、ラルゴだった。ラルゴの店で

働き始めてしばらくして、幼いけれども聰かつたティアは、表向ちは町の食堂を営んでいるラルゴが、時々秘密の話をしていることに気づいた。頼み込んで頼み込んで、ラルゴはしぶしぶティアが裏の仕事にかかわることを了解した。

キールはティアの本当の仕事を知らない。いや、ティアが知らせていないのだ。

純粹な心を持つたこの弟にだけは、自分の汚い部分を見られたくない  
それは、この仕事を始めた際、ラルゴにティアが出  
した唯一の条件だった。

「片付けはしておくから、キールは先に休んでいいよ。」

「そうしてくれると助かる、じゃあ先に寝るね。おやすみ。」

キールが眠りについた事を確認してから、ティアは大きく溜め息をついた。テーブルにうつ伏せになると途端にどつと疲れが押し寄せる。正直なところ食事をするような気分ではなかつたが、まだ温かさが残るこの食事を残しては、心優しい弟はきっと私の事を心配するだろ？。

温かいスープに少し硬くなつたパン。

この仕事を済ませて帰つてきた後はいつも、普段では「」く当たり前の事をしている自分に違和感を感じずにはいられない。いつものように食事をし、キールと話し、ベッドに入る。人の日常を奪つた私がこいつやって……。

いや、やめよ？。ここはあの暗い橋の下じゃない。ここは、弟と暮らす私の家。

残りのスープを喉の奥へ無理やり流し込み、ティアは食器を片付けた。

## 初めての、仕事

一番初めは簡単な仕事だつた。

「キールのためにビッグしてもお金がいるの、何だつてするから」

そう言つたティアにラルゴが渋々紹介したのは、表通りに大きな屋敷を構える中年の商人に嫁いだ年若い妻からの依頼で、幼馴染の男との駆け落ちを助ける仕事だつた。花売りに扮したティアが妻と幼馴染との手紙を幾度も運び、十分な計画を練ることができた二人は手に手を取り合つて無事に国境を越えたと聞いた。

妻からの報酬の一部をティアに渡す時、「俺がむやみやたらと屋敷に出入りしちゃあ、おれ自身が浮氣相手にされちまうからなあ、助かったよ」と言つて、ラルゴはティアの頭を撫でてくれた。

ティアがもう少し大きくなると、ラルゴは表の市場に出せない品物の運搬をティアに任せられるようになつた。ラルゴ自身はティアがこの仕事にますます深く関わっていくことに、いい顔はしなかつたが、キールの治療費にお金がかかることを姉弟以外で誰よりも知つていたのもまたラルゴであつた。

小さな少女であるティアが、そのような仕事に携わつているとは誰も思わないらしく、ティア自身の要領の良さともあいまつて、ティアは実に優秀な仕事人となつた。そつやつて仕事を重ねるうち、強盗の肩擔ぎのような汚い仕事、遂には暗殺稼業にまで手を出すことになつたのである。

暗殺には常に自分自身の身の危険が伴つものである。

ティアはキールのように病気を抱えているわけではないが、病弱な母から生まれたこともあって、体格は大柄でないどころか華奢で小柄なほうであるし、力も並みの女性よりも弱いくらいである。それでも今日までティアが無事に仕事を続けることができたのは、周囲の状況を的確に判断することができる頭の良さと冷静さ、身のこなしの素早さのおかげである。

ティアがこの仕事を始めたころから、ラルゴはティアに周囲の人間の観察方法や自分の身を守るための身のこなし方、そして武器としてのナイフの使い方を教えてくれた。

始めはうまく操れなかつたナイフであつたが、使い方の要領を覚えるとその後はよく手に馴染むようになった。ティアにとつてナイフは相性のよい武器だつたようである。ティアを上達させたのは、弟のために身も心も強くなりたい、強くなつて治療費を稼ぎたいと、いう想いだつた。

事実、ティアがこの仕事で稼いだお金によつて、キールの治療費は賄われていた。それでも、キールの病気はよくなる気配はなく、ティアが買う薬で病気の症状が緩和されている程度である。最近は昼間からベッドに臥せつていることが多い。優しいキールが、男である自分が働かずにはいることを気にしていて、ティアが家帰る頃には無理をして元気に振舞つていてもティアは気付いていた。

もう一度家族を失いたくない。心が無くなつてしまつようなんかな思いはもうしたくない。

ティアは、帰宅して家のドアを開けるたびに不安になる。弟が居なくなつて、自分が一人になつてしまつのではないか、と、そんな思いに囚われる。

## 真夜中のカウンターで

ティアが自分の生き方について憂いながら眠りについた夜半過ぎ。フードを田深にかぶつた一人の男がラルゴの店のカウンターに静かに座つた。

「お客様さん、はじめてだね。何にするかい？」

グラスに入った水をその男に差し出しながら軽く問い合わせたラルゴに、男は目を合わせることなく「暖かいゴラルクー」と小さな声で返した。

ラルゴは男に背を向けて、ゴラルクーが入った樽の栓を少し開け、その琥珀色の液体を火にかけるために小鍋に移した。もう少し早い時間であれば常連の客で賑わっている店内も、さすがにこの時間には客のほとんどが引き上げている。カウンターに座るフードの男が店を訪れる少し前に、最後まで残つていた常連の一人がフラフラの足取りで帰路につき、店の入り口の鍵をそろそろ閉めようかとラルゴが思つていたところに現れたのが、この男である。

火にかけたゴラルクーからほんのりと甘いアルコールの香りが漂い始めた頃、それまで静かに座つていたフードの男が、小さな声でラルゴの背中に声をかけた。

「依頼を、したいのだが。」

ラルゴはすぐには返事をしなかつた。

無言のまま、小鍋に入ったゴラルクーを陶器のグラスに注ぎ、カウンターの男に差し出した。振り返ったラルゴの表情には、先ほどの店主としての愛想の良さは無い。フードの男は相変わらずラルゴの顔を見ようとはしなかつたが、ラルゴが纏う空気が変わったことにはすぐに気づいた様子であった。

「で、内容は？」

普段、人が良いことで知られているラルゴからは想像もできないような冷静な声で、ラルゴは男に問いかけた。街の人々はあるか、ラルゴの裏の顔を知っているティアでさえ、ラルゴのこのような声は聞いたことがないだろ？

しかし、そのような冷え冷えとした空気もフードの男にとっては予想の範囲内であったようである。ラルゴから否定の言葉が出ないと確認すると、本題を切り出した。

「ある人物を殺してほしい。簡単に殺せるような相手ではないのだが。・・・万が一失敗しても、足がつなければかまわない。報酬はそちらの言い値を用意しよう。」

予想通りの依頼内容に、ラルゴは感情の無い声で「誰を殺すんだ」と問い合わせた。

## 真夜中のカウンターで（後書き）

「ゴラルクーは、ブランデーのよつな蒸留酒で、ショラール王国では一般的な庶民のお酒です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2295x/>

---

守りたいもの、諦めた未来

2011年11月27日18時50分発行